



安行小だより

安行小学校 7月号

令和4年7月1日

目指す学校像

よさを認め、学び合い高め合い、やる気と笑顔あふれる学校



伝説の校務員さん

校長 春川 嘉孝

以前、私が勤務していた小学校に「伝説の校務員さん」と呼ばれる方がいらっしゃいました。何が伝説かというと、とにかく何でも自分でできる、直せる、わからないことや疲れていても決してあきらめず頑張っている、そんな姿でした。毎日、夕方になると校舎を見回ってくれます。後ろに竹籠(？)、手には「金ばさみ」。廊下から「カチャ、カチャッ」と音がすると、校舎内に落ちている小さなゴミを、そのハサミでつまみ、かごに入れる。

当時教頭だった私に「教頭先生、私はどうしても言いたいことがある。少し時間をくれませんか」と。どうしても、教職員に伝えたいことがあったのです。それは、

「どうして掃除がおわったのに、ごみが落ちているのか。どうして、先生方や子供たちが歩いているのに、ごみが落ちているのか。不思議でならない。」「目の前にゴミが落ちていたら拾うでしょ。それは誰かに教わるものではないけど、そういうもの。」

強い口調だったのを覚えています。

本校には、2名の校務員が朝から校庭の落ち葉を拾ったり、壊れたものを直していたり、学校環境を整えてくれています。学校には、様々な人が「チーム安行小」に向けて働いています。そういった環境の中で、安行小の子供たちは過ごしています。

まもなく、夏休みを迎えます。入学・進級してから一学期間、共に過ごしてきた教室や廊下、校庭などに思いを寄せながら、過ごしてほしいと感じます。

みなさんは、ごみが落ちていたらどうしますか？

7月18日は「海の日」。現在、海洋プラスチックごみの問題が深刻です。50年後は、魚の量よりも「プラスチックごみの量」が上回ると予想されています。でも、考えてみてください。ペットボトルやビニール袋など皆さんは、どうしていますか？

「投げ捨て」「ポイ捨て」する人はいないと思います。ところが、ごみ箱にあふれたプラスチックごみなどが「流れ流れて川から海へ」向かっていきます。(道路のごみだけではありませんが)「落ちていること」に気づき「拾う」という行動ができれば、少しは変わるのだと思います。

目の前に落ちている「ごみ」。気づかないのかもしれない。気づいていても「拾わない」のかもしれない。もしそうだとしたら「大切な何か」も気づかないことになるのではないだろうか。気づいて行動に起こさなければ「大切な何か」を得るチャンスを逃してしまったのではないか。

伝説の校務員さんが言う「当たり前のこと」を「当たり前のようにできること」は、素晴らしいことなのだと思います。

7月、一学期のまとめをしっかりと行い、友達や自分を大切にしながら過ごして、有意義な「夏休み」を迎えてほしいと思います。